

新富町文化財調査報告書 第 48 集

ぎ おん ぼる こ ふん ぐん  
祇園原古墳群 10

国指定史跡「<sup>にゅうたばる</sup>新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書(10)



新田原59号墳

2 0 0 7

宮崎県 新富町教育委員会

## 序

宮崎県の一ツ瀬川流域は数多くの古墳群があることで知られています。このうち本町にある国指定史跡新田原古墳群は古墳時代後期を中心とした日向地方最大の首長墓群を中心としていることが、最近の調査で判明してきました。

新富町ではこの重要な史跡を広く活用するため、平成9年に策定した基本計画をもとに調査を行っています。

本年度は百足塚古墳の整備復元の実施設計策定にあわせて、同古墳出土の形象埴輪の復元公開を開催しました。

また整備の中心の一つとなる59号墳の調査も2ヶ年目に入り、一部68号墳の周溝確認調査も実施しました。

今後もこれら調査データを元に、整備計画を進める所存です。最後になりましたが、調査と計画立案の際にお世話になった関係者の方々には深く御礼申し上げます。

新富町教育長 下村 喜秋

## 例言

1. 本書は平成18年度に行った宮崎県児湯郡新富町に所在する国指定史跡新田原古墳群の史跡整備に向けた確認調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は新田原古墳群登録記念物保存修理事業として文化庁の国庫補助金と宮崎県費補助金を受け、宮崎県文化財課及び新田原古墳群史跡整備専門検討委員会の指導のもと行った。
3. 国指定史跡新田原古墳群は新富町内の大字新田に分布する古墳の指定名称であるが、古墳の分布は大きく4つに大別できるため、それぞれ塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。史跡整備の短期整備計画は祇園原古墳群を対象としている。
4. 本書の執筆編集は有馬が行った。
5. 本書で使用した位置図は国土地理院発行の2万5千分の1図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ現場にて平板測量した。
6. 本書で使用する方位は古墳群分布図以外はすべて磁北である。
7. 出土遺物とその他の記録類はすべて新富町教育委員会社会教育課で保管している。

## 本文目次

I. 古墳群の位置と調査の経緯	1～5ページ
II. 既往の調査	5～7ページ
III. 平成18年度の事業	7～18ページ
IV. まとめ	18ページ

# I. 古墳群の位置と調査の経緯

## 1. 国指定史跡「新田原古墳群」と祇園原古墳群の概要

### (1) 国指定史跡「新田原古墳群」の実態

国指定史跡新田原古墳群は一ツ瀬川左岸台地から沖積地に点在する古墳の総称である。

実態は、現在の新富町西部（旧新田村）にあった古墳を行政単位で指定措置した結果の名称であって、その分布の状況や推測される古墳の築造時期から、本来は大きく4つの古墳群に大別すべきものである。現在はそれぞれを別の古墳群と考え、東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。

### (2) 祇園原古墳群の概要

このうち祇園原古墳群は一ツ瀬川左岸台地上にあり、154基の高塚墳が現存している。内訳は前方後円墳14基、方墳1基、円墳138基、墳形不明1基だが、これまでの発掘調査で、墳丘が消滅した円墳の周溝が40基確認されているので、古墳総数は194基に及ぶ<sup>(1)</sup>。

古墳分布は標高70～90mの台地上で、西側直下には一ツ瀬川が流れ、東は一段高い台地になっている。また台地には南北に貫入する2本の谷があり、古墳群はこれら谷地形によって区分されたA～Dの4グループに大別できる。

墓域の形成は弥生時代終末期までさかのぼる。群の北東部高位台地で確認された川床遺跡には円形周溝墓・方形周溝墓を中心とした195基の土壌墓群が発見された。最近の調査によって、これら墓域の周辺の低位台地には、竪穴住居を中心とした小規模な集落が確認されている。

古墳時代前期になると北西部に前方後円墳が2基登場する。詳細はわからないが、Aグループの北西部に展開するグループは前期から中期にかけての築造である可能性が高い。

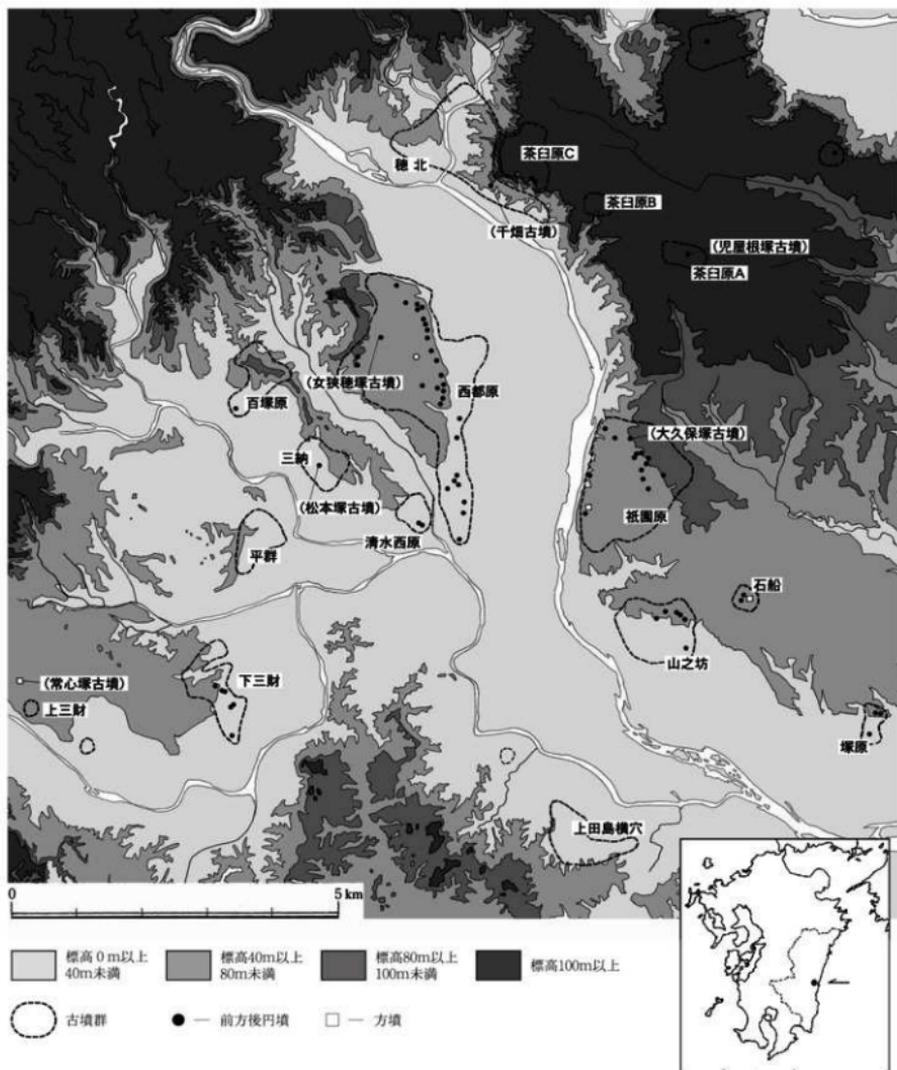
Aグループは東側傾斜面を南北につらなって築造された12基の前方後円墳が中心である。前期には、台地北西端部に前方部が低平で後円部径に対して狭大な前方後円墳が2基（187号墳・195号墳）築造されている。その後、5世紀中頃になって大久保塚古墳が造られる。表採される埴輪や埴形は、先述のように西都原古墳群の女狭穂塚古墳や茶臼原古墳群の児屋根塚古墳に類似するため、それらは前後する時期に築造されたものと推測できる。5世紀後半には大久保塚古墳に継続する古墳はみあたらないが、今後の調査で中小規模墳の築造時期がわかれば、古墳群築造の連続性を明らかにできる可能性もある。

6世紀になると前方後円墳の築造は爆発的に増加し、墳長60～100mの大型墳と墳長60m以下の中規模墳が築造され、その多くで埴輪が樹立されている。ほとんど調査されていないので詳細は今後の検討課題であるが、埴輪の検討から、前者は59号墳→百足塚古墳→68号墳→弥生部塚古墳と連続し、後者は水神塚古墳→機織塚古墳→52号墳と連続して築造されたと予想される。これら大規模墳と中規模墳は併行して築造された可能性が高く、古墳群全体としては中小の円墳を含めた階層構成型の群構造であると考えられる<sup>(2)</sup>。

B・Cグループは前方後円墳をそれぞれ1基づつ含む後期群集墳である。特にBグループではほ場整備にともなう調査で36基の消滅墳が検出され、周溝に掘られた二次的埋葬施設と考えられる地下式横穴が5基検出され、近接して4基の馬の埋葬土壌もあった。これら群集墳の築造は、出土した須恵器を検討すると、TK10型式併行期に始まり、MT85型式をピークに、準上りII型式まで継続するようだ<sup>(3)</sup>。

Bグループの霧島塚古墳は詳細不明だが、Cグループは前方後円墳の139号墳ののち、140号墳（円墳）・138号墳（方墳）と続く終末期の一首長墓系譜であり、石船古墳群のように6世紀後半になって派生新出したものだろう。祇園原古墳群はこれらの首長墓群を中心に、小円墳が数多く築造され、その結果、大きな古墳群となったのだろう。

群集墳の築造が終息し、2次の埋葬が行われるなか、A群の北部高位台地斜面に横穴墓群が築造されている。



第 1 図 一ツ瀬川流域の古墳群分布



第2図 祇園原古墳群の古墳分布

## 2. 整備までの経緯

新田原古墳群は昭和19年に指定措置を受けてから昭和40～50年代にかけて公有化がなされてきた。それら指定地は町が管理している。しかし公有化された墳丘は保護対象でありながらも、その周辺に存在する埋没した周溝や、古墳を取り巻く築造当時の地形など重要な考古学的情報は十分把握されていない。

このような状況のもと、指定措置から半世紀以上が経過し、建造物が古墳どうしの視界を遮り、農地のほ場整備によって旧地形が変化するなど、古墳を取り巻く周辺環境が大きく変化している。

このような状況に対し、町では平成元年度に管理策定書を刊行するなどの施策を実行してきた。また平成4年度に祇園原古墳群が分布する祇園原地区ではほ場整備が計画されたのをきっかけとして、平成7年度から追加指定措置と買収を行い、平成8年度には積極的な史跡の活用を目的に「新田原古墳群史跡整備基本計画」を策定した。

基本計画の骨子は「古墳の保存整備と同時に畑地のなかに点在する古墳の風景をさらに良好なものとし、歴史と自然が融合した景観整備を行う」ことであり、対象面積が広大であるため、短期・中期・長期からなる30年以上の計画とした<sup>(4)</sup>。

## 3. 短期整備計画

短期整備の範囲は、「新田原古墳群」のなかでも公有化率が高く、前方後円墳が多く分布する祇園原古墳群Aグループを対象とした。Aグループは墳丘や周溝を含めた古墳間が連続して町有



写真1 祇園原古墳群の古墳分布

地であるため、見学者の利便性にあった整備がしやすい。短期整備では、①主要な前方後円墳の復元、②ガイダンス施設の設置、③見学園路の整備を目的とした。整備期間は平成9年度から20年度までの13年間で、10年間にわたる発掘調査で百足塚古墳と59号墳の基礎データを整理し、墳丘復元やガイダンスでの展示を予定していた。

平成17年度には基本計画をより具体的に整理し、短期整備計画区域の整備方針として、A群を3つの段階に区分し、百足塚古墳・59号墳・68号墳の3基を含む第1期整備優先区域を5ヶ年間で整備する実施計画を立案した。

## II. 既往の調査

### 1. 整備事業までの調査

はじめて祇園原古墳群の記録が登場するのは、明治32年のことである。宮崎県を訪れた坪井正五郎は古墳群を巡視して、円筒埴輪列が残る古墳が存在することや、横穴式石室を採用した前方後円墳があることなどを略述している。この巡視の際に採集された形象埴輪は八木昭八郎によって紹介されたこともあった。

その後、大正4年には京都大学助手梅原末治（のち同大学教授）が西都原古墳群の調査に関連して児湯郡一帯の古墳群を巡視し、その結果を「日向西都原周辺の古墳」で紹介している<sup>(15)</sup>。主要古墳の名称が紹介されたのはこの時が初めてである。

昭和19年に国指定史跡となってからは調査の手が入ることがなく、本格的な調査が始まったのは最近になってからである。平成元年には新田原古墳群管理策定事業の一環として、古墳群の航空測量が行われ、その概要は平成5年に報告されている<sup>(16)</sup>。

平成3年度には、祇園原古墳群でほ場整備を目的とした発掘調査が開始され、昭和のはじめ頃に消滅した円墳36基の周溝が確認できるにいたった。周溝には2次のな埋葬主体部と考えられる地下式横穴が5基発見されている。また周溝に隣接する状態で発見された馬の埋葬土坑が5基発見されている。

平成5年度からは祇園原古墳群で宮崎大学考古学研究室との合同による墳丘測量調査がおこなわれ、祇園原古墳群の前方後円墳のほとんどで測量図作成がなされるにいたった。

### 2. 整備事業における確認調査

史跡整備事業における確認調査は、これまで百足塚古墳（新田原58号墳）と新田原59号墳の調査をおこなってきた。

#### (1) 百足塚古墳の調査

百足塚古墳は墳長76.4m、後円部径32m、前方部幅43.6m、クビレ部幅38mを測り、前方部をほぼ正南に向け、周囲に盾形周溝を有する2段築成の前方後円墳であることが判明した。墳丘は東から西への傾斜面に立地し、盾形周溝は東側では確認できるが、西側では等高線の実測でようやく痕跡を認め得るような状態であった。また北西部の周溝に近接して円墳（62号墳・63号墳）が2基あり、百足塚古墳に従属的な陪塚の可能性が高い。

百足塚古墳では平成5～6年度には指定地の追加を行う確認調査として、62号墳・63号墳を含んだ範囲にトレンチを4本設定した。その結果、それぞれの古墳で周溝が確認でき、62号墳と百足塚古墳には大量の埴輪が樹立されていたことがわかった。検出できたのはほとんどが円筒埴輪で、川西編年のV期に該当するため、両古墳は6世紀の築造であることが判明した。平成9年度からは史跡整備を目的とした調査を開始し、百足塚古墳に近接する62・63号墳の周溝の位置を把握する調査区（1区）、百足塚古墳後円部西側周溝を確認する調査区（2区）を調査し、それぞれ周溝と転落した埴輪片・弥生中期の住居址3軒を検出した。また前方部西側に設定したトレン



写真2 第1期整備区域

子から多くの形象埴輪片が出土した。

平成10年度から12年度には形象埴輪の配置や内容を確認するため、前方部西側周溝から後円部西側周溝に調査区（2区・3区）を設定した。調査の結果、周溝と同様に完周する「周堤」の存在とそこに樹立されていたであろう大量の形象埴輪が確認できた。周堤の外側には現在では部分的にしか確認できない外周溝（幅約50cm）があり、このことから周堤の幅は約6mであることがわかった。また周堤から西側クビレ部に向かう幅2mの土橋の存在も確認できた。形象埴輪の出土箇所はこの土橋から南側の周溝と外周溝内にいたる約40mにも及び、形象埴輪による祭祀行為はこの土橋から周堤上にあったと予想される。形象埴輪片の出土点数はプラスチックコンテナケースで約400箱にも及び、その数と種類は西日本でも類例の少ないものである。

平成13年度からは墳丘と東側周溝の確認調査を開始した。周溝は各所で立ち上がりを確認でき、おおそ盾形周溝が確認できることが判明した。また後円部に設定したIV区で埋葬主体と考えられる横穴式石室の閉塞部が確認できた。調査は閉塞部の取扱いを残し、すべてのトレンチは調査終了している。

#### (2) 新田原59号墳

平成17年度からは新田原59号墳の確認調査を開始し、墳丘主軸と後円部・クビレ部のトレンチを設定し、墳丘の遺存状況の確認調査を開始した。基本的に3ヶ年間で確認調査を行い、整備の方針をたてる予定である。

## III. 平成18年度の事業

### 1. 事業の概要

#### (1) 確認調査の概要

##### ①新田原59号墳の確認調査

第1期整備計画区域のうち、古墳群で最も高台に位置する新田原59号墳の調査を平成17年度から3ヶ年間で実施予定である。

調査は極力、調査面積を少なく、かつ墳丘や付帯的な遺構の遺存状況を把握するため、幅1mのトレンチを基本とし、各所に設定している。17年度の調査では墳丘主軸を縦断するトレンチ（2, 3, 5トレンチ）と、後円部・クビレ部をそれぞれ東側に横断するトレンチ（1, 4トレンチ）を設定し、それぞれ遺構の遺存状況を確認した。墳丘中段のテラスには各所において円筒埴輪列を確認することができた。

本年度の調査では前方部を横断するトレンチ（6, 7トレンチ）と後円部・クビレ部を西側に横断するトレンチ（8, 9トレンチ）を設定し、各部形状の把握を努めた。

##### ②新田原68号墳の確認調査

平成17年度に策定した実施計画では、検討事項として新田原59号墳北側の掘削地の地形復元を分析した。土砂の掘削時の話では、新田原59号墳北側の掘削時にそこから発生した土砂を新田原68号墳の周溝を埋めるためにつかたつたということだったので、第1期整備の中で、周溝の復元とその周辺の地形復元を考慮する必要があった。

そこで、新田原68号墳の周溝を埋設するために堆積した土量の確認と、地形復元のために必要とされる土量の計算を可能とするため、同古墳の前方部外側の状況を確認するトレンチを設定した（59-3～6トレンチ）。

#### (2) 百足塚古墳の埴輪復元及び特別展示

百足塚古墳からは総数60個体に及び形象埴輪が出土している。これまでにその3分の1が復元できたが、今年度の作業によってうち3分の1が新たに復元できたので、新富町文化会館で展示公開を行った。

展示期間は平成18年11月1日から同年12月23日までで、来館者は総数4000名に登った。公開を記念して宮崎大学教育文化学部の宮崎まゆみ教授に記念講演をお願いし、埴輪と楽器の世界について講演をいただいた。

(3) 百足塚古墳の復元整備実施設計図策定

平成16年度に調査終了した百足塚古墳について、復元整備をはかるために実施設計図を策定した。整備の方針としては段築を明瞭にし、崩壊している埴輪と外堤の復元を行うことを目標とした。

(4) 地域と共同した復元整備

地元小中学生を中心に参加を呼びかけ、百足塚古墳の埴輪列の復元のために、円筒埴輪を製作した。参加者70人で65本の円筒埴輪を作成し、宮崎県立西都原考古博物館の協力のもと、焼成後、古墳現地に並べている。

百足塚古墳の整備復元にあたっては、形象埴輪の公開に際して広くご意見や活用に参加される方を募集した。募集にあたっては30名の応募があり、今後活用のアイデアや研究会・講演会・円筒埴輪製作にあたって協力をいただく考えである。

## 2. 事業体制

本事業は新富町教育委員会が主体であり、県文化財課及び新田原古墳群史跡整備専門整備検討委員会の指導のもと行った。平成18年度の事業体制は下記のとおりである。

### 【平成18年度の事業体制】

- 総 括 下村 喜秋（新富町教育委員会教育長）  
          斉藤 久明（同 社会教育課長）  
          福原 広一（同 社会教育課長補佐兼社会体育係長）
- 庶 務 松本美奈子（同 社会教育課主事 庶務担当）
- 調整・調査 有馬 義人（同 社会教育課主査 文化財担当）
- 調査補助 樋渡将太郎（同 社会教育課主任主事 埋蔵文化財担当）
- 指 導 小田富士雄（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：福岡大学教授）  
          柳沢 一男（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：宮崎大学教授）  
          森本 幸裕（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：京都大学教授）  
          吉本 正典（宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財係主任）
- 作 業 員 杉尾美千子、甲斐 直美、坂本 貞夫、甲斐 晴子、清 美喜子  
          満尾 智美、溝口 敦子

## 3. 確認調査

### (1) 調査の方針

今年度の調査を含め、事業の性格上史跡整備のための確認調査であるため、以下のような点に留意して調査を行っている。

墳丘は幅1mのトレンチ調査を基本とする。各調査区は墳丘の形状を確認することが最大の目的であるため、埴輪、テラス、墳頂平面の状態把握を優先して実施した。

円筒埴輪は、遺存状態が良好な部分は現地保存を基本とするが、樹立位置で倒れていたり、樹立位置から移動している個体について取上げて整理復元する。

盛土の状態は墳丘構築の方法を知る重要な知見であるが、整備目的の調査であるため盛土であると認定できた段階で掘り下げを終了する。ただし盛土が埋土が不明瞭で判断ができない箇所は攪乱穴などを利用してサブトレンチを設定し確認を行う。

埋葬施設はその位置を確認するのみとし、開口部が判明した際でも、内部を調査しないこととしている。

## (2) 59号墳の確認調査

### ① 59号墳の概要

祇園原古墳群を見渡す標高80～90mの高位台地面に築造された前方後円墳である。いずれも現状で、墳長71m、後円部径32m、前方部幅42m、クビレ部幅24m、後前高差1mを測る。墳丘は後円部を北西方向に向け、東側には明瞭な周溝を認めることができるが、西側や南側はなだらかな斜面になっていて墳端部が不明瞭である。また北側は昭和40年代に土砂採取を目的とした大きな造成の手が入っているため、旧地形やかつて存在したであろう周溝の形状がわからなくなっている。また墳丘東側には円墳が3基、北側の周溝に近接したであろう箇所1基の円墳が認められる。

墳丘からは多くの埴輪片が採取でき、昨年度までの調査で後円部墳頂とテラスには円筒埴輪列が存在したことがわかっている。また後円部の西側周溝からは外堤から転落した状態で鶏形埴輪



写真3 6トレンチ調査状況



写真4 6トレンチ完掘状況



写真5 6トレンチ墳頂から

の頭部などの形象埴輪が検出され、西側外堤からは須恵器片が集中して検出された箇所が存在した。

### ② 確認調査の内容

墳丘の仮の主軸から、前方部で東側に直交する位置に6トレンチ、西側に直交する位置に7トレンチを設定した。また後円部西側に8トレンチ、クビレ部西側に9トレンチを設定し調査を開始しているが、年度末を中心とした調査のため詳細は次年度の報告とする。

6トレンチは仮の主軸から東側の周溝そして外堤までの範囲に及び、延長37m、幅1mの調査区である。墳頂には円筒埴輪の樹立痕は認められなかったが、墳頂から転落した埴輪片が確認できるため、もともとなかったとは断定できない。墳頂部に埋葬施設などは確認できない。テラスは現状で幅1m60cmを測る。テラス外側ではなくやや第2段傾斜に近い位置に円筒埴輪が3本確認できた。いずれも布握りなどの明確な鋳形が認められず、すべて現位置から転倒した状態である。2本はほぼ並んでいるが、残りの1本は間をおいた状態になっている。検出面の高さと遺存状態から、もともと間に円筒埴輪があったわけではなく、空間をわざとつくっていたものと考えたい。あるいは有機質の樹物が立ててあったのかもしれない。周溝は地表面からの深さ約60cmで底面が確認できた。墳丘及び外堤から転落した埴輪片が出土するが、後円部での検出量と比較してもあまり多くはなく、形象埴輪・須恵器はまったく含まない。外堤から周溝底面までの深さは1m50cm程度である。

外堤には円筒埴輪樹立痕はまったく認められず、須恵器などの破片なども検出できない。

7トレンチは仮の主軸から西側に直交するト



写真6 6トレンチテラス上の円筒埴輪



写真7 6トレンチテラス上の円筒埴輪列



写真8 6トレンチ外底から周溝

レンチで、延長22m、幅1mの調査区である。墳頂は6トレンチ同様に円筒埴輪列の痕跡は見い出せなかった。テラス上面には大きな倒木による攪乱穴があり、全体に遺存状態が悪い。テラスは幅1m60cm程度であるが、円筒埴輪が樹立した状態では確認できなかった。墳端はそのまま西側傾斜面につづくならぬ傾斜面にあって不明瞭で、もともと西側には周溝は存在しないようである。

両トレンチを比較してみると、テラスは西側で標高89m80cm、東側で同88mで、西側が1m80cm高く、墳端は西側で標高86m、東側で同84m程度で、西側が2m高い。

後円部・クビレ部付近の東側に設定した1・4トレンチでのテラスの高さが標高89m80cmであることと、墳丘の仮の主軸で設定した各トレンチにおける後円部と前方部のテラス標高が89m20cm程度であることを考慮すると、東側ではテラス面は一定の高さを保っているが、そのまま西側に向けて傾斜するような設定になっていると考えることができる。

墳端は、1・4・6トレンチの成果から北から南へ傾斜するように低くなり、同様に西側へも傾斜した地形に忠実なつくりになっているようである。

周溝は今年度までの調査では全体の形状は判然としませんが、東側では盾形の形状をしめす。南側と西側でどのような処理が施されているかが次年度の課題である。

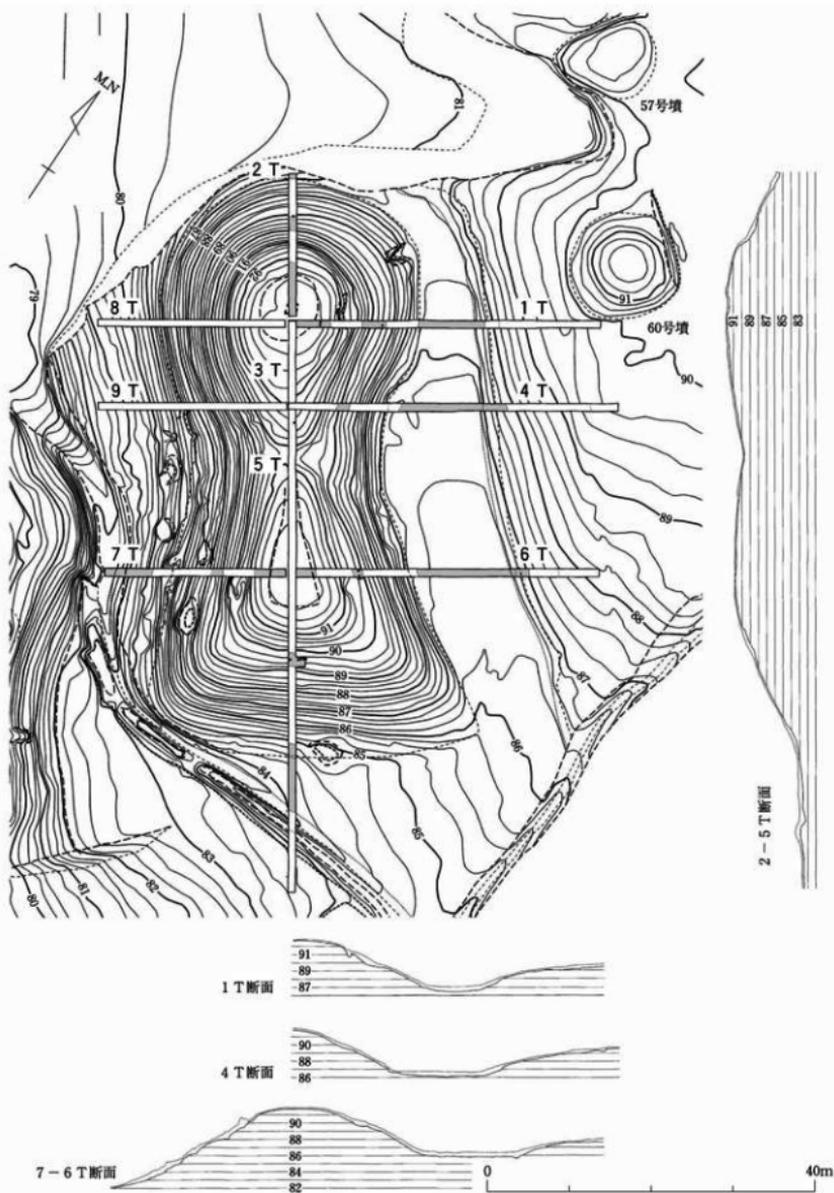
外堤は周溝同様に盾形の形状であるか判然としない。1・4トレンチでは須恵器の破砕跡や形象埴輪の断片が確認できたが、明確に外堤を区分する溝の存在や形象埴輪の集中配置などが認められる状況ではない。これも次年度の課題である。

#### 【出土遺物】

本年度出土した遺物はすべて円筒埴輪の破片で、このうち6トレンチのテラスで確認できた円筒埴輪列を構成する3個体以外はすべて断片資料である。

6トレンチで検出できた円筒埴輪のうち復元できた個体のデータは次のとおりである。

高さ61cm、基底部径21.5～23cm、口縁部径36.5cmを測る。段構成は基底部を含む5条突帯6段構成で、基底部を第1段としたときの第2段・第4段・第5段に透穴を施す。外面は基底部を除き1次調整タテハケのみで、比較的粗い原体を使用している。内面は粘土つなぎ目を明瞭に残す粗いタテナデを施し、口縁部付近はヨコナデを施す。



第3図 新田原59号墳の調査図

基底部は板押さえを施し、その圧痕は不明瞭に左回転をたどっている。突帯は断続ナデののち粗いヨコナデ仕上げを施している。

7トレンチで検出できた円筒埴輪は断片資料で、全体の3分の1が残っている。高さ41cm、基底部径約18cmを測るものと推測できる。段構成は基底部を含む3条突帯4段構成である。基底部を第1段としたときの第2段に透孔を施す。外面は基底部を除き1次調整タテハケのみで、比較的細かい原体を使用している。内面は比較的丁寧なタテナデを施し、口縁部付近はヨコナデを施す。基底部は板押さえを施し、その圧痕は不明瞭に左回転をたどっている。突帯は断続ナデののちヨコナデで仕上げている。

## (2)68号墳の確認調査

68号墳はこれまでの開発行為に伴う調査と国指地範囲拡大にともなう確認調査が行われており、前者を1区、後者を1トレンチ、2トレンチと呼称して整理する。



写真9 3トレンチの調査状況

### ①68号墳の概要

59号墳の西北側に立地する前方後円墳で、後円部を南西方向に向けて築造している。墳長60m、後円部径27m、前方部幅44m、クビレ部幅23m、後前高差-1mを測り、著しく前方部が高い。後円部の西側の一部は以前の町道建設で多少の掘削を受けている。周溝は現状ではまったく認められないが、1次調査と1・2トレンチの調査で盾形の周溝がめぐることが判明している。

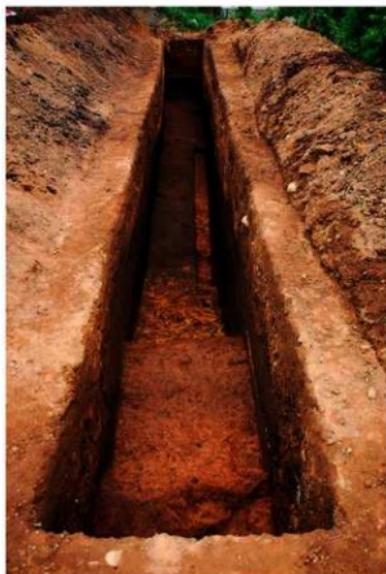


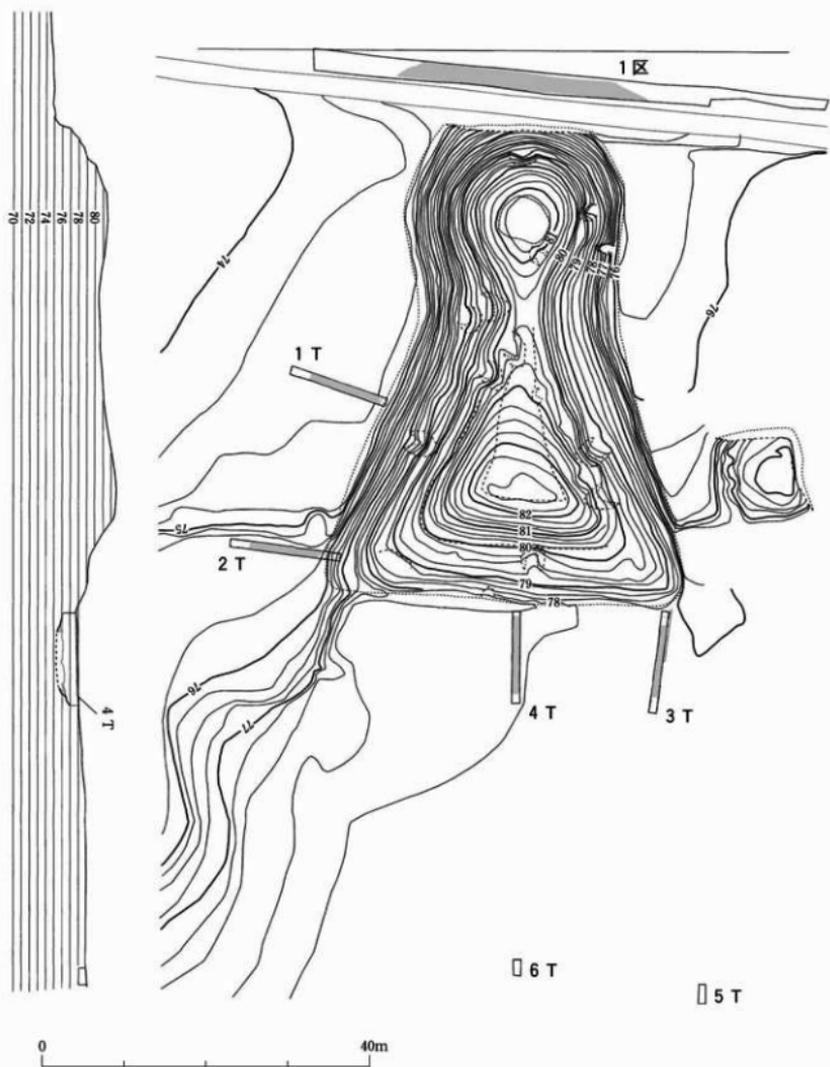
写真10 3トレンチ完掘状況



写真11 3トレンチ周溝立ち上がり



写真12 4トレンチ



第4図 新田原68号墳の調査図

## ② 確認調査の内容

前方部北側に任意に設定した3トレンチと、仮の主軸上に設定した4トレンチ、そして地山の遺存度を確認するための5・6トレンチで確認調査を行った。

3トレンチは延長12m50cm、幅1mの範囲を確認した。検出できた周溝の範囲は9m50cm程度で、客土の深さは約90cm、周溝埋土は約70cmを測る。周溝埋土からはまったく遺物は検出されない。4トレンチは延長11m、幅1mの範囲を確認した。検出できた周溝の範囲は9m70cmに及び、客土は深さ170cmで、周溝埋土は深さ60cmに及び。

5トレンチは幅1m・延長2mで、6トレンチは幅1m、延長2m40cmの範囲を確認した。いずれも表土の下は硬混じりのブロック土で覆われており、地山までの検出には及ばなかったが相当の客土量が見込まれる。

以上4箇所のトレンチと以前確認調査におけるデータをまとめると、周溝の形状は後円部側で狭く、前方部側で大きく開く形状が想定される。前方部側の周溝は深さ2m50cmまでが埋まっており、前方部全面は現状より開く可能性が高い。

このような調査結果から土砂採取の際の土の移動によって相当量の地形の改変と墳丘形態の変化があったと予想される。

## 4. 百足塚古墳出土遺物の整理及び公開

### (1) 整理作業

これまで作業で、形象埴輪の遺存個体は総数60点であることが判明している。本年度の作業では、報告書刊行を急ぐ必要と形象埴輪の全体像の把握のため、秋までの作業を形象埴輪の復元を急ぎ、年度後半の作業として後円部の石室



写真13 犬形埴輪、鶏形埴輪



写真14 円筒埴輪



写真15 人物埴輪



写真16 家形埴輪、甲冑形埴輪



写真17 盾形埴輪、盾持人形埴輪

開口部を中心とした円筒埴輪の整理復元を行った。

今年度の成果として、形象埴輪18点、円筒埴輪5点の復元を完了した。形象埴輪は人物埴輪3点、犬形埴輪1点、家形埴輪4点、柵形埴輪6点、甲冑形埴輪1点、太鼓形埴輪1点の復元を完了した。残す20点の形象埴輪の整理復元を次年度完了する予定である。

円筒埴輪は個体数が多いため接合関係の照合にとどめ、次年度復元整理を終了する予定である。

## (2) 公開

整理復元できた形象埴輪について、広く町内外に公開するために新富町文化会館で特別公開展を実施した。展示期間は平成18年11月1日から12月23日とし、開始時期は町文化祭での共催事業として広く町民に見学して頂く方法をとった。

新規公開の埴輪は18点で、11は1次公開（平成15年度実施）のものを展示した。開催期間中の見学者は概数で4,000人を超えた。当初は予定していなかったが、見学者の要望に応え、12月24日に講演会を開催した。今回初公開した太鼓形埴輪の一つのテーマとし、「古代の楽器と埴輪の世界」と題して、宮崎大学教育文化学部の宮崎まゆみ教授の講演をお願いした。

また本年度の文化庁主催事業として「発掘調査された日本列島2006」にも百足塚古墳の埴輪を出展し、13体の埴輪を全国7会場で多くの見学者に観覧いただいた。



写真18 百足塚古墳の埴輪展示会場



写真19 宮崎まゆみ先生の講演

## 5. 百足塚古墳の復元整備実施設計図の作成

### (1) 基本的な考え方

百足塚古墳は平成16年度までの調査によって、多数の形象埴輪が外堤に樹立してあったことや埋葬主体が横穴式石室であることなど、その内容が明かになっている。

しかしながら墳丘の端部や周溝及び外堤などは築造当時の姿を止めていないところが多い。史跡整備専門検討委員会の検討を通じて、町教育委員会では以下の復元整備における基本的な考え方をもった。

- ① 古墳本来の遺構面は絶対的に保存し、復元に際しては一定程度の埋土や被覆土でこれを保護する。この際、埴輪などの外表施設も同様に重要な遺構ととらえ、樹立位置に遺存する個体は保護する。
- ② 横穴式石室は現状の体制では調査・保護するのに万全ではないため、開口しない方向で整備を行う。
- ③ 2段築成である墳丘の形態はなるべく明瞭に復元する必要があるためのテラスは極力わかるように整備し、復元製作した円筒埴輪列を設置できるようにする。
- ④ 周溝・外堤は古墳を構成する重要な属性であるため、これを極力復元整備する。
- ⑤ 史跡を重要な地域資源として捉え、地域に根ざした整備事業とするため、町民が参加して、より近い存在とするための協働による整備活用をはかる。

以上の観点をもって、復元の方法を検討した。



写真20 展示会見学の様子



第5図 百足塚古墳の復元整備予定図面（計画策定中）

## (2) 復元方法の具体的な検討

百足塚古墳の復元整備実施設計図策定事業は株式会社中桐造園設計研究所に委託した。

委託に先立ち、町教育委員会で作成した200分の1スケールの墳丘測量図に、それぞれ発掘調査した遺構実測図(20分の1)を合成して貼り込み、現況図平面図を作成した。このデータに加えて4本の各縦断面・横断面を作成し、復元図の基礎資料をまとめた。

次に平面図と断面図から想定される古墳築造当初の推定ラインと、遺構保存も含めた復元ラインを設定した。設定にあたっては遺構の検出できた箇所を参考に、ある程度の規格性を考慮したが、すべてが規格性をもって構築されたとはいえない箇所も存在したので、そういった箇所については現状を優先してラインを設定している。

復元ラインは中段のテラスや周溝の内部に堆積した土を遺構を保護できる範囲で取り除き、墳端部や外堤などのすでに掘削された箇所に移動して盛土復元する方法で設定している。

築造当初2段築成であった墳丘を築造当時の状態に復元するため、テラス幅を明瞭な状態で復元し、周溝と外堤については遺存していない箇所も多いが、外堤外に遺存する溝状遺構の存在などからいずれもかつて完周していたものと想定した。

表土を掘削する箇所については最低30cm程度の埋土を残し、整備工事にさしあたっては転落し



写真21 粘土ねりあわせ作業



写真22 子どもたちの作業①



写真23 子どもたちの作業②



写真24 子どもたちの作業③



写真25 子どもたちの作業④



写真26 製作埴輪の展示

た埴輪片などをポイントで取り上げて保護する方法を検討している。

復元できたテラスと外堤には、今後さまざまな検討を行って、調査成果を反映させて円筒埴輪や形象埴輪を配置をめざしていきたい。

### (3) 地域で協力しての復元作業

本年度の取り組みとして他地域の先進例を参考に、子供達との埴輪の製作体験活動を実施した。70人の参加で65本の円筒埴輪を製作した。

百足塚古墳出土の円筒埴輪は、高さ約60cm、底径約20cmの4条突帯5段構成という規格性があるため、この規格を基本として実物の3分の2の大きさの複製品を製作した。

個々人で製作時間に長短があるが、2時間から4時間の製作時間で完成することがわかった。製作した複製品は宮崎県立西都原考古博物館の協力による電気窯焼成を行い、11月11日の古墳祭で百足塚古墳現地に仮設置してみたが、好評であった。

今後の取り組みのなかでも、町民・県民との協働作業によって埴輪などの製作復元をおこなってきたい。

## IV. まとめ

本年度の調査は、68号墳と59号墳の確認調査および百足塚古墳出土形象埴輪の復元作業、そして百足塚古墳の復元整備実施設計の策定を行った。

確認調査は、第1期整備計画区域の整備に必要な内容を次年度をもっておおそ終了できるものと考えられる。

百足塚古墳の形象埴輪の整理復元は、形象埴輪の3分の2までが復元完了した。新規公開の埴輪を中心に展示会をおこなって一定の事業に対する理解を得たものと考えられる。

今後は整備事業と同様に出土遺物の整理を行い、報告書作成を急ぎたい。



写真27 古墳祭の様子



写真28 古墳見学会の様子



写真29 整備専門視察委員会のスタッフ

### 【注】

- (1) 橋渡将太郎「町内遺跡19」新富町文化財調査報告書 第35集 新富町教育委員会 2003
- (2) 有馬義人「新田原古墳群」宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成 宮崎県 1997
- (3) 藤本貴仁「宮崎平野部の群集墳」宮崎考古 第16号 1998
- (4) 文化財保存計画協会編 新田原古墳群史跡整備基本計画書 新富町教育委員会 1996
- (5) 梅原未治「日向西都原付近の古墳」歴史地理 第25巻2号 歴史地理学会 大正4年
- (6) ②に同じ。

# 報告書抄録

ふりがな	ぎおんばるこぶんぐん 10
書名	祇園原古墳群10
副書名	平成18年度 発掘調査概要報告書
巻次	10
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第48集
編集者名	有馬 義人
編集機関	新富町教育委員会
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行年月日	2007年 3月

ふりがな 所収遺跡名・地区名	ふりがな 所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
にゅうたばる 新田原59号墳	あおあざにゅうたあびりがしまた 大字新田字東保	47	1001	061101 ゝ 070331	約103m <sup>2</sup>	史跡整備
にゅうたばる 新田原68号墳	あおあざにゅうたあびりがしまた 大字新田字東保	47	1001	060921 ゝ 061030	約28m <sup>2</sup>	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
にゅうたばる 新田原59号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳	埴輪・須恵器		円筒埴輪列
にゅうたばる 新田原68号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳	なし		周溝検出

新富町文化財調査報告書 第48集

## 祇園原古墳群10

発行年月日 2007年 3月  
 発行 宮崎県新富町教育委員会  
 印刷 ㈱印刷センタークロダ